第１回高知県史編さん基本方針策定準備検討委員会議事概要

日時：令和元年８月 23 日（金）
14 時 00 分～16 時 30 分
場所：高知会館３F「平安」

■出席者：井上委員、岡本委員、佐藤委員、宅間委員、羽賀委員、原委員、藤井委員、宮田委員、渡部委員
■事務局：橋口文化生活スポーツ部長、高橋文化生活スポーツ副部長（総括）、三木文化振興課長、宮本課長補佐、上田チーフ、田村、北代

１　開会

２　挨拶
・橋口文化生活スポーツ部長より開会挨拶

３　委員紹介
・事務局より各委員紹介

４　委員長・副委員長の選任
・事務局案（委員長：藤井委員、副委員長：羽賀委員）を提案し、承認された。

５　議事
（１）新たな高知県史編さんに向けた取組について
・資料１～３について事務局より説明
各委員質疑なし

（２）新たな高知県史編さんの方向性について
ア　編さんの目的について
・資料４，５について事務局より説明
【各委員主な意見】
○　前回の県史編さん以来、本格的な資料調査が地域で行われておらず、市町村の博物館では、人員や予算の問題などがあり難しい状況。県が動き始めることで、地域の資料の発掘や保存問題が大きく進むと期待されている。
県の委託事業により、高知城歴史博物館に支援室が設置され、地域資料の発掘などの基礎的な部分を地域が担う取り組みが始まっている。県史編さんにより、本格的に人材や体制などができれば、高知県民のために役立つのではないか。学芸員や教員などが県史に関わることで、次につながる人材が育つ仕組みを取り入れてもらいたい。

○　前回の県史編さん以降、新たに発見された資料をどのように加えていくか、資料収集をどのようにしていくかが重要。南海トラフ地震に備えて、どのように資料を保存していくか、後世に伝えていくことができるかという点も大きなテーマ。
前回は教員も動員したと聞いているが、学校の事情も変わってきており、書き手など県内のメンバーだけでは難しいと感じる。

○　各県の目的にある「県民の共通財産」や「愛着」、「理解」などは、自然分野に直結する内容。環境やインフラ整備、人口、社会経済など時代と共に変遷してきたことは、どのようなことか自然の分野にスポットを当てて議論していただきたい。

　また、地震対策として、高知県はいろいろな努力をしており、自然災害や危機管理などハード・ソフト面で、どのように行ったかという点を加えると、この時代の努力を後世に残すことができる。

○　40 年前の県史編さんや近年の高知市史編さんにも関わっているが、市史編さんでは、県内の人材だけではなく、県外の先生にも協力していただいた。県史編さんが新たな人材育成の動機になるのではないか。また、幕末維新博での各地域の資料館の資料整理や学芸員の研究成果が県史に役立つのではないかと期待している。

○　前回の民俗編では、取り上げられていない項目があり、カバーする必要があるのではないか。前回の県史刊行後に、新たに発掘、蓄積された資料をどのように加えていくか。民俗調査が難しく、昔のように人に話を聞いてできるかが分からない。また、担い手が非常に少ない。担い手の問題などをどのように解決し、前回の県史の内容も踏まえて、研究成果や必要な資料を盛り込んだ民俗編ができるのか考えていかなければならない。

○　次の世代の担い手がいるのか、宗教美術の分野など、まだ人材が育っておらず、他県の先生方による調査など、ネットワークが大事。

　収集した資料をどこに保管するのかという問題も発生してくる。また、研究史や博物館史など県史の中に活かしていきたい新たな分野が、かなり出てきており、どのように取り入れていくかを考えなければいけない。

○　これまでの地方自治体史は、社会が発展していく前提で、達成度をどのように残していくのかという目的であったが、今は、全国的に過疎化が進み、文書や民俗などが一世代持つかという状況。本に残すことも重要だが、残すためのポリシーや方法論を提示して、限られた人材の中でどのように共有していくか。また、成果の返し方として、最終形態は本が一番良いと思うが、データベースなど様々な形で一般社会、研究者に返す方法もある。中間媒体で何が残せるのか検証しながらできると良い。

　大学も地域と連携していくことには積極的であり、大学と県の公的機関同士の協定などで、シームレスな形で事業を展開していくことが大事。

○　政治史だけでなく多くのジャンルを総合したバランスのとれたものが必要。近代は、県や市町村の公文書を基幹にしないとバランスのとれた歴史編さんができない。

　また、地域資料をどの程度発掘するのか。旧近世村の文書に非常に貴重な資料があり、公文書類と旧近世村の文書を発掘、整理し、基礎をつくる必要がある。通史編については、県内外の方に読んでもらうという視点が必要で、その為にどのような工夫をするのかを考えなければならない。

○　若い人材が育たないと県史の編さんはできない。資料の発掘については、前回の県史編さん後の資料の問題と前回取り上げていないものが各分野にあり、それをどのように整理するか。また、資料の悉皆調査をするのか。南海トラフ地震によって被災する可能性もあり、資料をどのような形で残していくのかも重要。

　また、現代をいつまでとするのか難しい課題だが、一定あるところまでは書いた方が

いい。今後、検討していく必要がある。
　編さんの目的については、これまでに作られた県史、自治体史の時代背景と、現在の時代背景の違いを踏まえて、何を目標とするのか。今回結論を出すのではなく、今日の議論を踏まえて、事務局でもう少し練り上げたものを、次回検討したい。

イ　編さんの範囲・分野について
・資料６～８について事務局より説明
【各委員の主な意見】
○　平成終了までを編さん範囲とした場合に、この時代を 10 年、15 年で評価できるものか。最近の事柄で、評価しやすい面がある一方、その後に評価が変わる可能性があるのではないか。

○　昭和（1989 年）までが一番いい形ではないか。平成までは研究も進んでおらず、資料もない。研究者が圧倒的に少なく、歴史だけでなく社会学や地理学の先生と協力しなければ戦後史は難しい。

○　知事選や市町村合併など、基本的な事柄には言及してもよいのでは。大きな事件や概要については、本編の最後に叙述することも必要になるのではないか。

○　自然分野で参考になるのは、過去にどのような被害を受けたかということ。記録で事実を述べることが大切であり、できるだけ新しい時代まで入れたほうがいい。古い時代も新たな記録が出れば入れるとよいが、分析に時間がかかる。
　地図を入れるというアイデアは非常に良い。社会科学では地図から様々な分析をすることも非常に重要。

○　前回は民俗編で通史が１冊であったが、前回対象とならなかった項目をカバーすると、１冊では足りないのではないか。民俗資料編で、今回残してほしいと思うものは、近代の市町村史の民俗の部分や調査・研究報告など。前回は、民俗の聞き書きが入ってない。昭和の暮らしや戦争体験の聞き書き資料は大事かと思う。冊数・ページ数より先に内容や考え方から整理をしていくのが筋。民俗編と民俗資料編、各１冊では足りないと思う。

○　刊行冊数などの問題はこれから大きな検討課題になる。全体のボリュームの中で検討していきたい。

○　前回の県史の中世編は非常に高いレベル。今でも非常に大きな意味を持っている。
　新たな県史では、地域分けを行い、家別などでどれくらいの資料があったのかという形で、前回の資料集と連動させて作業を進めた方がよい。また、人名注や地名注などは、ほぼ付いておらず、充実させていくことが必要。中世をどこまで扱っていくか、近世の分野と一緒に調査を行いながら見極めていくのがいいのではないか。過去の江戸時代の段階と現状というものを洗い直すことで、高知県の中世史研究の状況が変わってくるのではないか。

○　県外資料をどのように扱うかを考えなければいけない。他の自治体史の編さんにおいても、県外と県内で人材の棲み分けや作業分けを行っている。長宗我部氏や幕末維新期

については、資料がどれだけ残っているのか。県内に残っているものだけでは成立しない。独立したものをつくるとなると決断がいる。

○　幕末維新と自由民権運動については、独立したものができれば理想。写本の精査や原本が残っていないものもあるため大変な作業となる。部会を立ち上げないと難しい。

○　考古学は学問の範囲が広がっており、産業考古学や地震考古学など各分野に及んでいる。自然の分野も含めて一緒に考えていく問題がある。また、戦争遺跡をどのように扱っていくかも難しい問題。仏教美術などは、歴史的な関わりが、あまり調査されておらず、県史で取り上げるならば、どのように踏み込むかが課題。

○　美術や仏教等については、通史編の中に盛り込むことはあり得るが、資料編を作るか、内容をどのようにするかは問題が残っている。また、編さん期間をいつまで対象とするかについては、もう少し議論をしたうえで決めていきたい。終期については、実際に編さん作業が進むと、いろいろな意見がでるので、厳密にしすぎない方がいい。

（以上）